

博士（人間科学）学位論文 概要書

〈沖縄戦〉後のエスノグラフィ

痕跡と記憶の戦跡空間

Ethnography of post-Battle of Okinawa
Battle Sites, Traces and Imaginaire

2006年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

北村 毅

KITAMURA, Tsuyoshi

研究指導教員： 蔵持 不三也 教授

本論は、沖縄の「戦跡」という場とそこで行われる実践において、**沖縄戦の記憶**がどのように表象されてきたのか、という問題を扱うものである。それはまた、いかなる社会的・歴史的コンテクストの中で、なぜ、そのように表象されなければならなかったのか、つまり、その表象の過程に、どのような社会的・文化的想像力が作用しているのか、を問おうとすることである。

本論における「戦跡」とは、単なる「戦闘のあった跡」（広辞苑）でも、近年歴史的遺産、文化遺産としての価値が急速に高まっている「戦争遺跡」の略語でもない。そこは、遺骨収集、慰霊塔・慰霊碑の建立、慰霊祭、戦死者供養、戦跡巡礼（巡拝）、戦跡観光、戦争の語りの実践（語り部、「平和ガイド」）などを通して、生者が死者に実践的な関わりをもつ場である。本論では、その実践的な関わりが、戦跡空間に見出される、**死者の痕跡**（遺骨、遺物、遺品、慰霊塔・碑、名、証言など）を介して行われてきたことに注目する。

本論では、「平和」のイマジネールという分析概念を導入したが、それは、戦死者の「犠牲」が〈戦後〉の「平和」と「繁栄」をもたらしたという、戦後日本社会の定見（常理）を創り出す社会的・文化的な想像力として機能している。**第1部「痕跡の戦跡景観」**では、戦跡景観を巡って、「平和」のイマジネールがどのように空間的に表象されてきたのかを検証し、**第2部「痕跡を辿る人々」**ではそこを舞台に展開された日本遺族会青年部の慰霊実践を事例として、「平和」のイマジネールが彼らのナショナルな共同性を編み上げる原理としてどのように作用してきたのかを論じた。そして、**第3部「痕跡を語る」**では、「平和」のイマジネールが「ナショナルな語り」を通して表現されてきた「記憶の場」——戦跡の「表通り」——を検証し、1970年代以降、それに抗する拠点として設定された戦跡の「裏通り」において、いかなる対抗的实践がなされてきたかを明らかにした。

第1部では、敗戦直後から現在までの半世紀の間に、死者の痕跡が戦跡景観の中に展開される様式がどのように変化してきたのか、その変転のダイナミクスを追った。敗戦直後から1950年代まで（**第1章「沖縄戦の痕跡の原風景」**）、60年代から日本復帰前後まで（**第2章「遺骨の行方、その中央集権化」**）、そして、90年代から現在まで（**第3章「摩文仁——拮抗する〈平和〉のイマジネール」**）の三つの時代区分に焦点化し、「遺骨野ざらし」報道、摩文仁を中心とした各都道府県の慰霊塔建立、「霊域整備事業」や遺骨収集、「平和の礎」などを事例として、その景観の変化に「平和」のイマジネールがどのように作用しているかを論じた。

第2部では、沖縄戦戦死者の遺族（遺児）の戦跡を巡る実践を考察した。「日本遺族会」が、次代の継承者たる「遺児」を訓育する場所として、沖縄の戦跡を最大限に活用したことはほとんど知られていない。**第4章「ナショナリズムと戦跡——遺族会青年部の〈平和祈願慰霊大行進〉と戦跡巡礼」**では、「民主」と「平和」

の戦後教育を受けた日本遺族会青年部の遺児たちが、戦跡という場所で〈父〉の足跡（痕跡）をトレースすることによって、いかにナショナルな共同性を確立していったのか、その過程にどのように「平和」のイメージが作用しているのかを論証した。一方、第5章「痕跡と喪——戦死者に〈出逢う〉ということ」では、戦跡において、遺族の「喪の作業」がいかにように果たされたのかを考察した。そこでは、戦跡空間は、第4章に見たような、死者の死を意味づける場（何のために死んだのか）ではなく、死者の死を追認する場（どのように死んだのか）として理解される。

第3部では、死者の痕跡を通して沖縄戦が語られる、相対するふたつの形式について論じた。まず、第6章「〈ナショナルな語り〉のモード」では、長い間沖縄戦の支配的な語りであった、戦死者が国家のために死んだ者として表象される「ナショナルな語り」について検討した。琉球政府、そして沖縄県の観光施策に則り、かつ慰霊巡拝団を中心とした観光客のニーズを満たそうとした、オーセンティックな戦跡観光の「表通り」では、そのような語りが再生産され続けた。それに対してアンチテーゼを突きつけた語りの場が、戦跡の「裏通り」であった。第7章「戦争体験継承の臨界点——ガマと平和ガイド」では、その「裏通り」を舞台として、「ナショナルな語り」に回収されえない死者について語られる「証言の領域」について考察した。そこでは、生者と死者は実践的な関わり合いを持つ。具体的には、「ガマ」（自然洞窟）を巡る「平和ガイド」の実践を事例として、死者の「代弁＝表象」の政治から限りなく迂遠な戦争の語りの未来像を析出した。